クロスロード新聞

第12号

2007 年7月26日

4K対決！
高知から！神戸から！
亀岡から！呉から！

発行元：108-8345　港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

高知県から2報告、神戸、亀岡、呉から報告！

　ファシリテータの皆さんこんにちは。7月は、台風と地震で大変でしたね。非常招集がかかって、職場に待機された方も多かったのではないかと思います。
　さて、今号は、頭文字がKで始まる4都市から報告をいただきました。
　クロスロード育ての親の高知県では、皆さんもすでにご承知の通り、さまざまな場面でクロスロードをご活用いただいています。まず2ページに、高知県内の全市町村の新採用職員を対象とした研修での活用事例を、研修を担当された高知県地震・防災課の小溝智子さんからレポートいただきました。また、高知県自主防災組織リーダー研修会において、NPO高知市民会議が、クロスロードを活用してくださっています。今号ではその活動報告の中から、オリジナル問題を中心にご紹介します。
　そして、おなじみ神戸クロスロード研究会からは大阪と亀岡の2つのクロスロードの報告をいただきました。大特集です！
　さて、問題は右の写真、この煙の正体は?子どもたちの運命やいかに?正解は12ページをご覧ください。

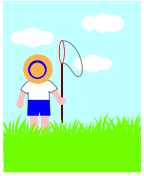
問題作りの極意ここにあり！
ファシリテータ鉄人西さん登場です

　クロスロード新聞第2号の神戸特集にご寄稿くださった神戸クロスロード研究会の皆さん。ファシリテーション協会の2007年フォーラムで実施されたクロスロードの問題作りのワークショップの様子を、研究会の柿本さんがレポートくださいました。3ページから大特集です。

設問作りをファシリテートするワークショップの鉄人西さん

目次

高知県から実践報告続々！　1
問題つくりの極意　1
全市町村職員新採用職員研修　2
クロスロード新方式誕生！　3−5
片づけられない　5
こんなところに心理学(13)　6
やればできる・・はず　6
自主防災会組織リーダー会研修　7−9
亀岡deクロスロード　10-11
ダック！ダック！ダーック！その2　12



クロスロード次号のご案内
発行予定日：９．２６
高知自主防災リーダー会続報、マンション編、、、などなど盛りだくさん！

責任編集

- チームクロスロード
- クロスロード・サポーター
- SPECIAL THANKS:
  高知県地震・防災課
  小溝智子（漫画企画）

高知県の全市町村新採用職員研修でクロスロード！

高知県では、市町村の新採職員の研修は、こうち人づくり広域連合という一部事務組合で行っています。高知県危機管理部地震・防災課の小溝智子が講師となって、その研修にクロスロードを取り入れてもう今年で３年目になります。毎年神戸編のカードを使って、クロスロードを行います。その度にアンケートをとって思うのですが、この神戸編は、市町村公務員になりたての職員さんに、地震災害の対応の困難さをイメージしてもらうのにまさしく最適なカードです。

アンケートのおもな結果は以下のようでした。

・南海地震への個人としての心がまえが足りていないと、また、職員としての対策やふるまいの難しさを知りました。

・地震対策のグループ討論は、実践的な問題で、判断材料の幅広さや深刻さを考えさせられました。

・南海地震の研修では、ジレンマのゲームを通して、あらゆるケースと対処の仕方、決断力とその速さ等について、改めて考えさせられました。そして、その時に自分は公務員としての行動がきちんととれるのか・・・と不安にもなりました。又、自分自身が地震対策をしていなかったので、講師の方の「助けられる側でなく、助ける側です」の言葉にハッとし、いつかしなければ、という甘い考えを改め、帰宅後すぐに取りかかろうと思いました。

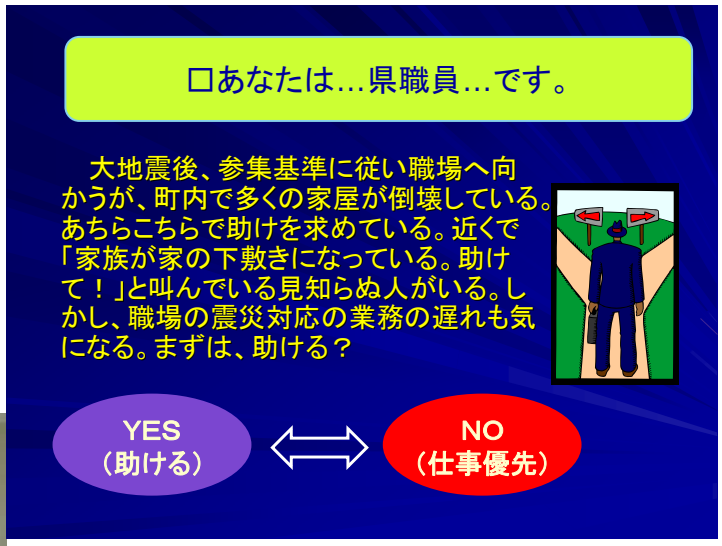
・南海地震への県民の意識の低さに驚きました。私自身も意識が低く、このままでは公務員として恥ずかしいので努力をしたいと思います。

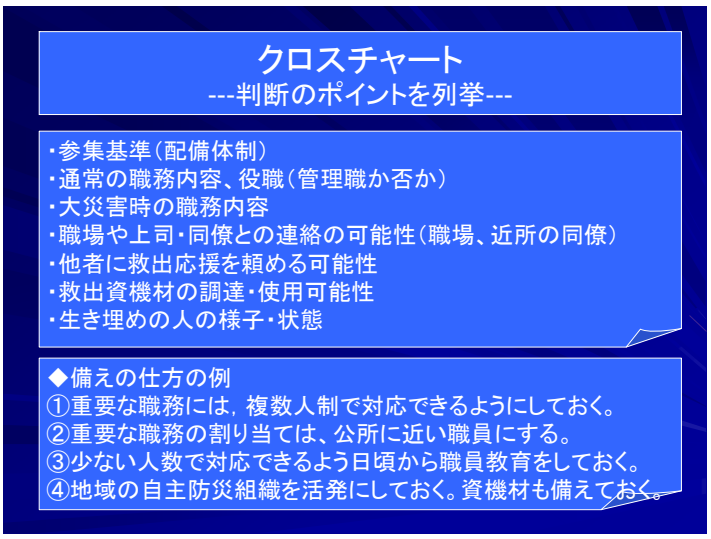
実施の様子

今年の受講者は、１３８人。平成１９年４月５日と２６日の２グループに分けてそれぞれ行いました。午前中に一時間半くらい南海地震についての講義をした後、午後にクロスロードを行いました。時間配分は、ゲーム解説５分、クロスロード５０分、問題への解説３０分で行いました。

以下の出勤ジレンマ問題を解説しました。新規採用職員たちが、(各地の震災事例から「教訓」となっている答えとは全く反対のカードなのに)全員そろって安心していたり、現場をしらないはずの「上司の指示」を絶対視していたり、情報が入るのを待つような発言をしているのを見たり聞いたりしていると、クロスロードの存在意義をひしひしとかみしめる私なのでした。

(高知県地震・防災課　小溝智子さん)





上：出勤ジレンマ問題、下：クロスチャート

クロスロードの新方式　誕生！

皆さんご存知のように、クロスロードは、阪神・淡路大震災における神戸市職員の経験など、予め用意された設問についてＹｅｓ／Ｎｏをカードで示し、意見や経験を共有するリスクコミュニケーションのツールです。いわば、“演繹型”ゲームです。

このクロスロードを、まちづくりファシリテーターの養成教材として展開することを考えていた神戸市職員の西修さんが、参加者自らが設問を作成し、その場でクロスロードとして実施する“帰納型”クロスロードを考案し、今年(平成19年) 5月の「ファシリテーションフォーラム2007」で発表されました。この稿では、その時の様子を中心に、西さん考案の新方式をご紹介します。（レポーター：神戸クロスロード研究会　柿本雅通さん)

◆発表まで―考案の経緯―

西さんは、神戸市職員で「神戸クロスロード研究会」のメンバーですが、「神戸まちづくりワークショップ研究会」や「ＮＰＯ法人日本ファシリテーション協会」でも活動しているワークショップの“鉄人”です。その豊富なファシリテーションの経験が、これまでも神戸方式のクロスロードのプログラムに反映されています。

西さんは、クロスロードのコミュニケーションツールとしての優れた側面に着目し、人材養成や研修に活用できないか考えていました。そこに、昨年度(平成18年度)、職員提案制度で採用された案をもとに神戸市役所の職員人材開発センターからコーディネーター養成研修の企画について相談があり、クロスロードによるプログラムを考案・実施することになりました。このプログラムを試行するために、平成19年3月22日(木)午後6時30分、神戸市職員の時間外研修で、西さん考案の新方式クロスロードが実施されました。参加者は２３名、３班に分かれました。最初に、2問だけ従来ルールで参加者にクロスロードに慣れてもらい、その後、各班で設問作成が行なわれました。

参加者参加型の設問作成は、神戸クロスロード研究会では、平成18年8月に神戸市北区星和台で防災福祉コミュニティーが開催した住民向けクロスロード研修において、事前に役員の方と一緒に設問を考え、役員の方が考えた設問を実施した例がありました。その他の地域や神戸以外の職員研修でも、地域やその自治体にあった形に設問アレンジしたりして、参加者になじみある設問作りに取り組んできました。しかし、参加者全員が、しかもその場で設問を作成し、研修にしてしまうのは全く初めて。

新方式の“西クロスロード”は、まず最初に全体のテーマを決めます。このときのテーマは「地域とかかわる仕事での経験」参加者は、自分の経験や意見を出し合いながら、にぎやかに設問作りを進めます。出来上がった設問は以下のとおりです。

「まちづくり協議会の準備会の場でひとり声高に自分の意見を主張する住民がいます。他の住民はあまり積極的に発言しません。あなたはその人の発言を止めますか？ＹＥＳ（止める）／ＮＯ（止めない）」

「あなたは役所の職員です。あなたの所管外の仕事を市民から頼まれ、断ると『前の担当はしてくれたのに！！』と言われてしまいました。さあ、あなたならその仕事をする？ＹＥＳ（する）／ＮＯ（しない）」

「あなたは役所の職員です。話をしに行った地域の人の家で『ちょっとウチでごはんでも食べていかへんか？』と言われました。さあ、あなたなら食べますか？ＹＥＳ（食べる）／ＮＯ（食べない）」

「あなたは公園の管理を担当する職員です。公園の手入れを熱心にされているボランティアの方から、花づくりも定着したので、今度は木の手入れをしたいと言われました。あなたは認めますか？ＹＥＳ（認める）／ＮＯ（認めない）」などなど。

早速、その設問でクロスロードを実施。またまた盛り上がったのは当然ですが、テーマについての理解が一層深まった感じがしました。この研修での実績を踏まえて、次は5月のフォーラムで実施です。

４K対決！
高知から！神戸から！
亀岡から！呉から！

新方式(続報)

◆フォーラムでの発表

ＮＰＯ法人日本ファシリテーション協会(略称：ＦＡＪ)は、会員数約１,０００名の全国的な団体です。その全国大会「ファシリテーションフォーラム2007」が、平成19年5月26～27日に大阪市のＡＴＣホールで開催されました。フォーラムの2日目、27日(日)午前中の分科会「共感・共有の新ツール『クロスロード』で行こう」において、“西クロスロード”が実施されました。

午前9時30分開会。快晴。参加者数２５名。クロスロード考案者の一人、吉川肇子先生に「クロスロードができるまで」と題して、20分程度クロスロードの概要を講演していただきました。実は、吉川先生は、ゲーミング・シミュレーション学会を、役員であるにもかかわらず、途中抜け出しての友情出演。ありがとうございました。

続いて、クロスロードの紹介。サブファシリテーターを浜さん、コメンテーターを柿本が担当し、自己紹介によるアイスブレイクに続いて、神戸編から3問を選んで行ないました。ノリもよく、「オープン」と同時に歓声もあがり、まずまずの反応でしたが、今回の参加者は、さまざまな分野でファシリテーターとして活躍する“プロ”ばかり。評価が気になります。

ここで西さんは、ポストイットを使って、クロスロードの「強み・弱み」についての意見をあぶりだします。「コメンテーターがいない場合は？」、「重いテーマにも意見が出しやすい」、「場合によってはただのゲームで終わってしまう」、「生の経験を追体験できる」、「点数狙いになる」「Ｙｅｓ／Ｎｏで違いがはっきりする」、「限られた状況で判断するときに有効」「金座布団の意味は？」など貴重かつ鋭い指摘をいただきました。これに対して、吉川先生からも「金ザブ狙いといいながら、実は自分の意見を言いたい人がいるようだ」「心理学者としてはゲームとして勝負に徹してもらえばいいと思っている。そうすると、他の人がどう考えるのかを真剣に考えることになる」などコメントをいただき、クロスロードへの理解を深めることになりました。

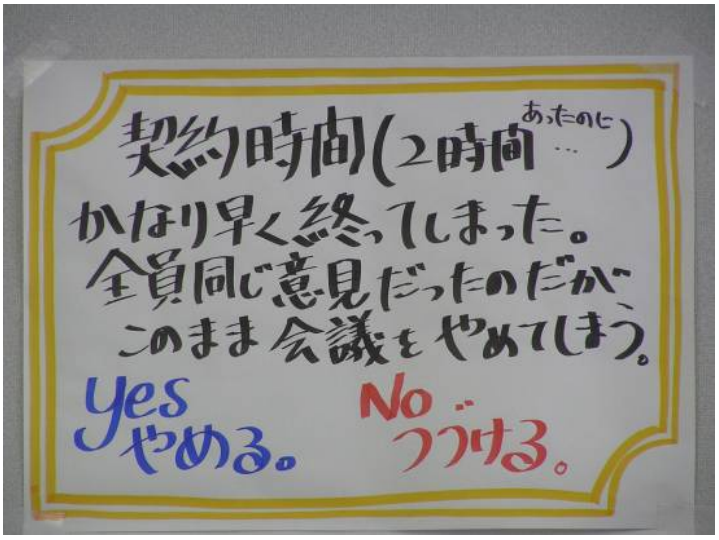
◆新方式登場

そして、いよいよ設問づくりです。テーマは「ファシリテーション・ファシリテーターの現場で」のジレンマ。「困った」、「迷った」、「失敗した」経験を、参加者は、それぞれ色の異なるポストイットに記入していきます。記入が終わり、各班でそれぞれの体験について交流したところで、設問作りに取り掛かります。「意見が出ない。待つべきか」、「一人でたくさん話す人がいる」などお互いの経験を見て「あるある」、「これはいける」と言いながら、時には自分の対処法を披露したりして、楽しく設問作りが進んでいきました。

設問ができあがると、各班から１問ずつ設問を出してもらって、クロスロードとして実施してみます。

「あなたは会議のファシリテーター。契約時間が2時間あったのにかなり早く会議が終わってしまった。全員同じ意見だったのだが、このまま会議をやめてしまう？　ＹＥＳ（やめる）／ＮＯ（つづける）」、

クロスロードの弱みと強みを書き出す



左：会場の様子、上：新作問題

新方式(さらに、続報)

「あなたはまち系の経験豊かなファシリテーター。今日は、市民が参加した都市計画の会議。ファシリテーターは今日がデビューの後輩。あなたは事前に「今日は口出ししないから、まかせる」と後輩に言ってあります。ところが、参加者の一人が演説をはじめ、後輩は困っているようすです。あなたはだまって見ている？　ＹＥＳ（だまってみている）／ＮＯ（介入する）」
など、参加者の様々な経験から生まれた設問が続々登場しました。参加者にとっては、共感できる問題ばかりですから、一層盛り上がります。オープンの後、参加者から理由を聞きます。先述の都市計画の会議での問題については「本人は失敗だと分かっている。その会議を優先させたいので、Ｎｏにした。」、「私のときは、上司が見守ってくれたのでＹｅｓ」などそれぞれの経験に裏付けられた意見の共有が図られました。

ゲームが終わって、座布団の多い人や班のメンバーにお菓子の賞品を配布した後、参加者に「ふりかえり」をしてもらいました。「マニュアル作成に役立ちそう」、「子供が他人と関わるきっかけ作りに役立つのでは」、「自分たちで設問を作るのはおもしろかった」、「色々なテーマについてできる」「本物の座布団でやってみたい」などの意見をいただきました。

吉川先生からも、「今日は学会を抜け出してきた価値があった。クロスロードの新たな可能性を感じることができた。オリジナルは最小限のルールしか決めていない。それぞれの場にあったルールを工夫してもらったらよい。新たな活用方法に挑戦されたときはインターネット上に開設している『クロスロード新聞』に是非投稿してください。」とコメントをいただきました。

みんなでふりかえり

このフォーラムをきっかけに、クロスロードは新たな分野へ広まって行くに違いありません。今回の活動で、クロスロードの潜在的な力をまた発見したような気がしました。「悩み」を「楽しみ」に変える、そんなポジティブな力を持っている。ＡＴＣの窓から青く広がる大阪湾を望みながら、そう思わずにはいられませんでした。

新作問題の投稿はこちら↓から！

【応募先】108-8345　港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局
電話：06-5427-1251

電子投稿はこちら↓
http://maechan.net/crossroad/toukou.html

片づけられない

©やなせたかし

4K対決！
高知から！神戸から！
亀岡から！呉から！

こんなところに心理学(13)：「やればできる」という気持ち

みんなでダック！思い出に残る園児の絵

防災訓練や、防災についての勉強をする時に重要なことにはどんなものがあるでしょうか?もちろん、練習をして、それが上手になる、つまり技能の向上はありますよね。たとえば、消火器の使い方をマスターすることはその1つの例でしょう。

このほかにも訓練や教育にとって大事なことがあります。それは、参加者に「やればできる」という気持ちを持ってもらうことです。

この「やればできる」という気持ちのことを、心理学では「自己効力感(セルフ・エフィカシー、self-efficacy)」といっています。厳密な定義は省略しますが、簡単に言えば、自分の行動について、自分でコントロールできるという感覚ということなのです。

防災について学んでも「そんな大災害が来るなら、私は何もできないかも？」「私はもう年だから、耐震補強しても仕方がない」というように思われたのでは、せっかくの勉強がその人のためになりません。そうではなく、「これなら私にもできそうだ」ということがあってはじめて、人は実際にそれを行動に移すのです。

前号(11号)で実践の紹介があった「ぼうさいダック」は、幼稚園や保育園のお子さんたちに「地震の時にわたし（ぼく）にもできることがある」(=ダックのポーズ)と、自己効力感を引き出していることがポイントになっています。先生の指示に従って避難訓練をすることも、確かに技能の向上という視点からは重要です。しかし、それだけではなく、たとえ大人が近くにいなくても、「自分の身は自分で守る」ことができると思うことこそ、子どもたちの積極的な行動へつながっていくのです。

自己効力感の研究結果からは、自己効力感を持っている人は、その後のさらに難しい課題が出てきても、それに挑戦するようになったり、学習した行動を持続させることが可能になることがわかっています。このことから、防災訓練や学習の効果を高め、維持するためには、自己効力感を持ってもらえるかどうかが、その後の学習や、効果の持続に影響するということになります。そのためには、災害の恐さを強調しすぎたり、やるべきことを押しつけすぎたりして、参加者の自己効力感を奪わないように心がける必要があります。

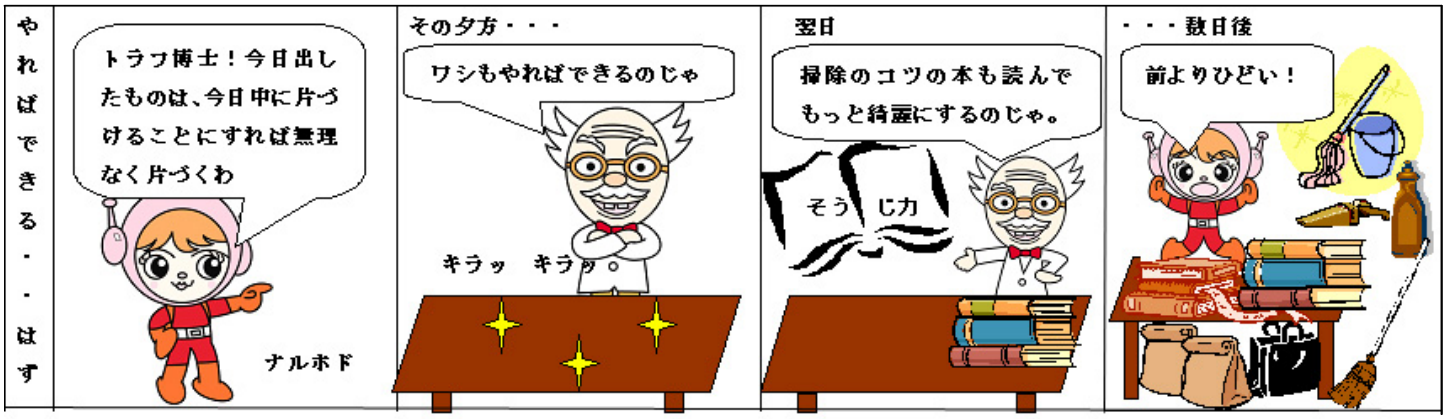
自己効力感とは逆のような気持ちをさすのが、「学習性無力感(ラーンド・ヘルプレスネス、learned helplessness) 」ということばです。これは、「私はできない」という感覚を学習することを指します。学習性無力感を持った人は、いくら周りの人が「これはやさしい問題だからできるよ」といっても、課題に取り組もうとはしません。なぜなら、「私は無力である」ということを学習しているために、「その課題が(客観的に見て)やさしいかどうか」ということは、本人はもはや考えてすらいないからなのです。

大変不幸なことですが、誘拐された人が、脱出の機会があるのにもかかわらず脱出せず何年も監禁されていた事件や、家族の暴力を受けながらも家庭から逃げ出すことができない人のことを、私たちは時々ニュースで知ることがあります。このようなことがあるのは、被害にあっている人たちが、「自分は何もできることはない」と学習してしまった結果、本当にできないかどうかすらも確かめる気力を失ってしまうためなのです。

「災害に対して無力な自分」を学習するのではなく、「災害に対してできることがある自分」と、思ってもらえるよう、防災訓練や学習を計画したいものです。

やればできる・・はず

©やなせたかし



高知県自主防災組織リーダー研修会での新作問題

高知県の自主防災組織リーダー研修会四万十市会場(平成19年1月14日実施)で使われた水と食料の配分問題をご紹介します。以下に参加者のかたがたの意見の主なものもあげてあります。

さて、ファシリテータの皆さんの意見は「分ける」でしょうか?「分けない」でしょうか?

■あなたは‥町内会長‥です。

■地震発生！道路は寸断され、地区は孤立している。自宅は無事だが、水・食糧の備蓄は2日間しかない。隣家は日頃から防災訓練にも参加せず、町内会費も納めず備蓄ゼロ。幼児がいるので水と食糧を分けて欲しいと頼まれた。東南海地震も同時発生し、現在の状況では高知県には水・食糧がいつ供給されるかも判らない。

水と食糧を分ける？

	はい(分ける)／ 45人	いいえ(分けない)／ 4人
理　由	・人道的に幼児の分は仕方ない(7) ・今後の付き合いを考えて(3) ・立場上皆を守る義務がある ・周りが自然に恵まれているので、なんとかなる(3)	・反省を込めて心を鬼にする。 ・一人に分けると他の人にもとなる ・日頃から協力しない家庭だから ・まずは自分の家族が第一(2)
問題点	・他に同じ状態の人もいる(2) ・甘えの空気が醸成される ・他の役員や住民からの反発 ・自分の家族が困る(3) ・救援物資がいつ届くか不安(2)	・他の人も同じ対応をするだろう ・人道に反する ・後から周囲から批判されるかも ・幼児の健康状態が心配(2)
事前に備えておけること	・日常の付き合いをよくしておく(5) ・地区の行事等に参加しやすい雰囲気をつくる(4) ・防災会で備蓄している：水 ・地域で備蓄しておく ・備蓄の必要性を啓発しておく(4) ・みんなで家にある材料を出し合うような炊き出し訓練を行っておく ・行政で備蓄しておく(但し地区が孤立するとあてにできない)	

※（　）内は出された意見のグループ数を表示

当日は、左の写真のように、クロスノートを参加者の皆さんで書いて、発表もおこなわれました。

また、このワークショップでは、津波被害が心配される地域と、心配されない地域とでグループ分けをして、それぞれ異なる問題が出題されました。全体で8グループできましたが、それぞれの問題と、参加者の皆さんの意見は、8ページに紹介してあります。問題の違いと、参加者の意見の違いを見比べてみてください。

クロスノートの発表！

左：実施の様子

津波被害が心配される地区に対しての問題

■あなたは・・住民・・です。
■地震発生から20分で津波到達が予想される地区に住んでいる。 地震発生！5分経過。近所の親しい独居高齢者に戸口から声をかけると、家具に挟まれて動けないという返事。他の住民達はもう避難を始めている。避難場所まで5分の距離。
救出する？

	はい（救出する）／ 21人	いいえ（救出しない）／ 6人
理　由	・見殺しにはできない(3) ・周りの人に協力を依頼する(3) ・声を掛けた以上は救出する ・自主防災組織のリーダーとして当然 ・親しい友人だから ・時間の許す限り努力する	・我が身の安全が第一(3) ・時間に余裕がない ・一人では無理な可能性が高い ・自分の体力に自信がない
問題点	・2次災害に発展する危険(2) ・短時間で助けられるのか ・何人かの手助けが必要 ・救出を断念する判断が困難	・後で救出できたかもと後悔する(3) ・津波がくるとは限らない
事前に備えておけること	・家具の固定（できない人には地域のフォローも必要）(4) ・寝室に倒れやすい家具を置かない(3) ・防災資機材を用意しておく(2) ・日頃からの声のかけ合いを徹底 ・地域や家庭で防災について定期的に話し合う ・2階建て以上の場合は1階に寝ない	

津波被害が心配されない地区に対しての問題

■あなたは・・自主防災組織のリーダー・・です。
■地震発生！1キロ程離れたところに住んでいる小学校低学年の孫がひとりで留守番をしている。安否が気になる。だが、自主防災組織のリーダーとして地域の人の救出を優先すべきかどうか迷う。
まずは孫の安否を優先する？

	はい（確認する）／ 8人	いいえ（確認しない）／ 9人
理　由	・まずは身内の安全確認が大事(3) ・身内の安否確認ができないなら誰もリーダーはやらない	・リーダーとしては近所の救出優先(2) ・遠くの家族より両隣が優先 ・自分が行ったところで何ができるのか
問題点	・途中で助けを求める人を無視できない ・すぐには帰ってこられないかも ・地域の救出が遅れる	・孫が心配で活動が手につかない(2) ・孫に何かあると後悔する(2)
事前に備えておけること	・隣近所での助け合いの体制を作っておくと安心(2) ・各班ごとに動ける組織作りをする（リーダーの負担を減らす）(2) ・日頃から家族の中で連絡方法を確認しておく(2) ・日頃から地区内での連絡体制をつくっておく	

※（　）内は出された意見のグループ数を表示

左の「津波が心配される地区」と「心配されない地区」での問題は、安田町と高知市でも出題されました。下には、「津波が心配される地区」の問題に対しての、安田町と高知市の参加者の方の回答を紹介しています。参加者の方の回答傾向の違いや、意見の違いを比べてみてください。

安田町会場

	はい（救出する）／ 28人	いいえ（救出しない）／ 10人
理　由	・人命救助が第一(3) ・周囲に声をかけ救出する(3) ・近所に住んでいる責任感(2) ・10分等時間を限定して救出する ・危険が迫るまでは努力する	・まずは我が身の安全第一(4) ・一人では無理だろう(3) ・20分は想定ですぐに来るかも ・津波てんでんこ(東北地方の言伝えで津波は我先に逃げても批判されない)
問題点	・自分の身が危険・共倒れ(3) ・20分は想定ですぐに津波がくるかも ・一人でできるかどうか疑問 ・2次災害の危険性	・後で人間関係が悪化する(2) ・要救助者が子どもだと苦悩する ・60分後に来たときの世間の目 ・非人道的と後で後悔する
事前に備えておけること	・家具の転倒防止を行う(4)　・要援護者を把握(マップづくり)しておき誰が助けに行くか決めておく(3) ・家の出入り口にバールなど道具を備えておく(2) ・日頃の対策をしっかりしておく(資材確保・避難訓練)(2) ・家の耐震化(2)　・地域でバールなど機材を整備し、迅速に救出できる体制をつくる ・防潮堤の整備　・この問題を地域に投げかけ日頃から考えておく ・子どもも巻き込んで防災学習をする。	

高知市会場

	はい（救出する）／ 12人	いいえ（救出しない）／ 3人
理　由	・家族がいるので協力すれば大丈夫 ・残された10分は救出する。 ・親しいから ・倒壊ではなく家具に挟まれた程度なら救出できる可能性が高い	・助けたい気持ちはあるが自分の安全第一 ・現在の自主防災組織の状況を考えると自分の家族を避難させるので精一杯 ・日頃から家具固定をしていないので仕方ない
問題点	・10分(短時間)で救出できるか疑問(2) ・自分も巻き込まれる危険あり(2) ・正確な判断ができるのか疑問 ・夜間だと無理だと思う	・罪悪感が残る ・後で批判される
事前に備えておけること	・家具の転倒防止(2)　・寝室の耐震化(2)　・寝室に家具を置かない　・2階で寝る ・近所との連携を普段から確立する　・救出・救助の訓練を日頃から実践しておく ・安否確認の方法を決めておく　・独力で避難するという合意を事前に得ておく	

※（　）内は出された意見のグループ数を表示

参加者全体のアンケート結果も報告します。全体では118人中、95人（81%）が「参考になった」と回答されています。「参考になった」理由としては「参加者同士のコミュニケーションが深まった」「意見のとりまとめや協議の進め方の参考になった」「問題への対処能力が高まる」「様々な意見が聞ける」「直面する問題で意識向上になる」「今後地域で取り入れたい」というような意見がありました。他方、「本音が聞ける」と言う方と、「本音と建て前を分けている」という方と、感想がわかれたのも興味深いところです。

このリーダー研修会の様子については、次号でも続報します。ご期待ください。

左：安田町
下：高知市

亀岡市ｄｅクロスロード

平成19年6月22日(金)午後、京都府亀岡市の職員向け研修でクロスロードを使った研修が行なわれ、神戸クロスロード研究会もお手伝いさせていただきました。ということで、亀岡市のクロスロードによる職員研修の様子をご紹介します。(レポーター：神戸クロスロード研究会　柿本雅通さん)

◆亀岡市とは

亀岡市は、京都市の北西に位置し、いわば京都の奥座敷。川下りで有名な保津川沿いに以前は走っていた山陰本線で30分ほど電車に揺られ、山間を抜けると、青々と広がる田んぼが目に飛び込んできました。明智光秀が居城を構えたこともあり、祇園祭とも関わりのある亀岡祭が10月に催されるなど、農産物だけでなく歴史・文化も豊かなまちです。

◆亀岡市とクロスロード

クロスロードによる職員研修を企画された亀岡市人事課主任主幹の山内俊房さんは、神戸都市問題研究所が主催し、昨年8月に神戸市の三宮で開催された「リスクコミュニケーションフォーラム」に参加され、クロスロードに出会います。

クロスロードを亀岡市でできないか、と考えた山内さんは、今年１月末、神戸都市問題研究所に、そのフォーラムを担当し、神戸クロスロード研究会のメンバーでもある大島博文さんを訪問します。大島さんに呼ばれて柿本も同席し、亀岡市での研修のお手伝いをすることになりました。

◆事前準備

とはいえ、保津川下り以外は亀岡市のことを知らない当方にとって、事前打ち合わせは欠かせません。５月末、山内さんに再度神戸にお越しいただき、亀岡市の地理や市勢、防災計画などを伺い、山内さんと一緒に神戸編の中から設問を選択しました。

研修については、前半を大島さんが担当する阪神・淡路大震災とリスクコミュニケーションについての講演とし、後半をクロスロードによる研修としました。震災の経験を伝えるため、要請に応じて、経験ある神戸市職員やＯＢが日本各地に講演に行くことがあります。クロスロードについては、神戸市危機管理室が、泉南５市の職員研修で、講演と合わせて実施したことがあります。神戸クロスロード研究会も、今年１月にマッセ大阪で１時間のクロスロードを実施したことがあります。とはいえ、神戸市外で講演とセットで実施するのは今回が初めて。

また、参加者数が40人を越えるということでしたので、神戸クロスロード研究会から浜尚美さんに応援してもらうことにしました。さらに、矢守先生も理事を務めているＮＰＯ法人日本災害救援ボランティアネットワーク理事の寺本弘伸さんにも、見習いという名目で手伝っていただくことになりました(寺本さん、こき使ってゴメンなさい！)。

◆研修当日

会場は、亀岡市役所1階の市民ホール。当日は、雨。にもかかわらず、予定通りの46名が参加されました。

研修名は「安全・安心のまちづくり研修」。最初に、大島さんが１時間弱の講演をされました。大島さんは、神戸市職員ですが、自治体学会や都市学会の会員でもあり、また、公務員の全国的なネットワークの一つである「自治体職員有志の会」の設立者の一人として知られた方でもあります。阪神・淡路大震災のとき、総務局庶務課の防災担当職員として災害対策本部の真っ只中にいた大島さんは、神戸都市問題研究所に勤務中にＮＩＲＡの助成を受けてリスクコミュニケーションの研究もしました。講演の内容も、実体験と理論、そして調査に裏付けられた説得力のあるものでした。

大島さんの講演

◆いよいよ本番

大島さんの講演後、10分の休憩を挟んで、いよいよクロスロード研修です。メインファシテイターとコメンテーターは柿本が、サブファシリテーターは浜さんが、Ｙｅｓ／Ｎｏを集計し、ホワイトボードへの記入は寺本さんが担当しました。参加者は９班に分かれました。

最初にクロスロードの開発経緯とルールを説明し、アイスブレイクの自己紹介後、設問１を柿本が読み上げて開始です。今回用意した設問は、先生方が作られたクロスロード神戸編から次の７問を選び、地震の発生直後から時間の経過に沿って出題しました。

設問１：神戸編1015(出勤)
設問２：神戸編1001(災害対策本部と報道)
設問３：神戸編1008(避難所と食料配布)
設問４：神戸編1027(報道と救援物資)
設問５：神戸編1018(避難所と注文受付窓口)
設問６：神戸編1014(瓦礫処理と分別)
設問７：神戸編1010(仮設住宅と学校)

４K対決！
高知から！神戸から！
亀岡から！呉から！

リラックスしてクロスロードにのぞんでもらおうと思った柿本は、笑いをとろうとしますが、亀岡市の方は実にまじめ。設問１の後、リラックスのため屈伸運動を入れますが、滑ってしまいました。意見も設問１は殆どがＹｅｓ、設問２も殆どがＮｏで、あまり意見が分かれません。災害対応について皆さんよく勉強されているせいか、理由も「その通り」と言いたくなるものばかり。はて、亀岡には研修をしに来たのか、教えられに来たのか？

◆“対立”を掘り起こす

しかし、そこはクロスロード。設問が進むに連れ、Ｙｅｓ／Ｎｏが分かれ始めました。サブファシリテーターの浜さんも、各班の意見交換に加わり、議論を活性化させます。

今回改めて感じたのは、クロスロードをファシリテートする場合の２つのポイントです。１つは、もちろん、Ｙｅｓ／Ｎｏの“対立”をいかにコーディネートするか。もう一つは、全員同じ意見の場合に、どうやって“対立”を掘り起こすか。今回は、この後者について悩んだわけですが、“対立”を掘り起こすことは、実は、設問の持つ多様な側面に参加者に気づいてもらい、災害対応の多面性を理解してもらうことに他なりません。

それを助けてくれたのが、サブファシリテーターの浜さんでした。浜さんが、にこやかに各テーブルを回ることで、クロスロードの楽しさを参加者に満喫していただけたのではないでしょうか。それに、９班ぐらいの規模になると、ファシリテーターと参加者のコミュニケーションが不足しがちです。やはりサブの役割が重要だな、と痛感しました。

参加者からも貴重な経験が引き出されます。亀岡市は、阪神・淡路大震災のとき、かなりの揺れにより塀が倒れる被害もあり、また、救援物資の集積拠点の一つだったそうです。コメントにも亀岡市内の避難所数など具体的で参加者に身近な例を引き合いに出しながら、災害対応のイメージが膨らむように努めました。そうこうしているうちに、7問全てを終え、1時間50分の研修時間を楽しく終えることができました。

最後に参加者に記入していただいた「今日のふりかえり」には、「メンバーみんなの意見が聞けて、自分だけの狭い知識が少しは広くなった気がします」「同じケースでも地域の事情や特性により違った結果が導き出されることが当然のことなのに新鮮でした」「災害時の対応への意識付け、どう対応していくのかの一端が見えたのではないか」などとても真摯な意見を記入していただきました。中には、「進行の仕方、場のもり上げ方、最高でした！」などのコメントもいただき、ホッとした次第です。同時に、災害の経験を伝えるとは、今現在、自分だったらどうするかということを考えてもらうことであること、そしてクロスロードを通じて亀岡市の方々と共有できたことに感謝せざるを得ませんでした。

①←

④→

②←

⑤→

③←

⑥→

◆新たなクロスロードの星

亀岡市では、この研修の後、全職場でクロスロード研修を行うよう指示が出ました。クロスロードを活用しているところは数あれど、全職場で実施するのは初めてではないでしょうか。実は、亀岡市は、保津川(桂川)の増水による水害を何度も経験しています。あの目に飛び込んできた田んぼも、水害のときは水に浸かるため、家屋を建てないのだそうです。

このように防災の知恵が今に生きる亀岡市におけるクロスロードの展開が、そしてクロスロードを通じたつながりの広がりが、ますます楽しみになった今回のクロスロードでした。

写真①全体②名サブ！浜さん③グループの中で④コメントされる柿本さん⑤振り返り⑥景品贈呈！

ダック！ ダック！ ダーック！

― 「自助の心は幼児から」　ぼうさいダック，呉から全国へ発信中！ ―　（その２）

【これまでのダック】

不安だらけの初めてのダック。子供たちは，予想を遥かに越え楽しんでくれた。はじけるような笑顔に達成感はあったが，そこに大きな落とし穴。「地震＝なまず」が子供たちには分からない，いや，そもそも「なまず」を知らないことが判明。ネット検索，水族館・動物園巡りをはじめ，「クロスロードサポーターの集い：大阪会場」でも問いかけるも，「決め手」になるアイテムがない。はてさてどうしたものやら･･･。

【なますどん登場！】

「 なまず」の問題を抱えたまま，３回目のダックを展開。ここでも，なまずは直感的に理解してもらうしかありませんでした。絵や写真を使って，なまずを見せても「わからなーい！」「知らなーい！」の連発･･･。ダックは本当に楽しそうにやってくれるだけに，「何とかしなくては」と逸る気持ちが･･･。ダックを終え，保育士先生に，「地震＝なまずを理解してもらうために，何か良い方法はありませんか？困ってるんです」の問いに，「昔話で，地震となまずを教材としたアニメがありますよ！」と嬉しい即答！その教材を早速お借りし，観てみたところ，これが面白い！主人公は「なまずどん」と「山の神様」。①なまずと地震の関係，②からだ（頭）を守るという対応行動，「なまずどん」の警告を軽んじたために，結果的に被害に遭う「山の神様」が語られ，③警報とその備えの大切さを学べるるという，まさにダックのプロローグとして抜群の教材が見つかったのです。

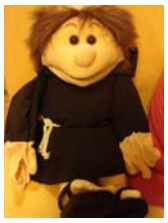
【強力なアイテムが続々と！】

「クロスロードサポーターの集い」での問いかけに，吉川先生が，吉川市（よしかわ市：埼玉県）の「なまず」のぬいぐるみをすぐに発見してくださり，先生より提供して頂きました。これに連鎖して，ダックに使われている動物たちの，ぬいぐるみも次々に揃えて行き，プロローグとして「なまずどん」の教材アニメを観て，実践にぬいぐるみを使うことで（写真１），ダックへの食いつきと，面白さが急加速して行ったのです。さらに強力なアイテム３つ。消防局職員の子供が手作りした絵本式ルールブック，地震仮想体験用「荷物運搬用台車」，避難訓練用スモークマシンの登場です。絵本や紙芝居に強い興味を持つ子供たちは，プロジェクターを使ったルール説明と違って，手作りのルールブックに，なまずアニメと同様，食い入るように見入っていました。地震仮想体験は，台車の上に子供を乗せ，揺れたときにダックのポーズが取れるか確認するものです。初めは，揺れる台車上に子供を乗せることに，事故を心配しましたが，子供は身体の重心が低いため，台車から転倒する子供はなく，安全に，しかも「楽しんで」実施することができました（写真２）。スモークマシンは，ゲームの終わりあたりに，予告なく実施します。これによって，保育士先生の指示を待つことなく，自ら口にハンカチを当て，姿勢を低くし，避難するという行動が確認できました（1ページの写真はこれ！）。また，スモークマシンと同時並行的に，先生方による１１９番通報訓練，初期消火訓練を実施します。これによって，消防法で義務付けられている消防訓練として位置付け，全市に展開していくことができたのです。

【吉川先生をお招きしての公開保育】

２月１５日（木），吉川先生を呉市にお招きし，地域公開保育「ぼうさいダック」を２つの園で展開しました。一つは幼年消防クラブ，もう一つは，「不安だらけの初めてのダック」を実施した園です。幼年消防クラブでは，「吉川先生がお越しになるのだから，練習をしておいたほうがいのでは？」との問いかけがあったのですが，「い～え！全くのゼロの状態から始めます。それが訓練です」と説明し，保育士先生方と協力して，アニメやぬいぐるみを使って楽しくダックを進めました。「次は何？」と好奇心一杯の子供たちに，吉川先生が，「外国のお坊さん」と共にゲームを進めてくださいました。ゲーム終盤，突然のスモークマシンにも，子供たちは慌てることなく（保護者が慌てている！）自ら口にハンカチを当て，低い姿勢を取り，園庭へ静かに避難して行きました。初めてのダックでも，学習がすぐに反映されていることが確認されました。吉川先生をお招きしての地域公開保育の内容は，まだまだ盛りだくさん！この続きと，さらなるダックの展開（カルタや民生委員児童委員さんによるダック）は，またまた次号で･･･。

（ 呉市消防局　林　国夫さん）



謎のお坊さん現る！

写真1

写真2